

「低地ドイツ語の方向を表す前置詞の特徴 –標準ドイツ語と比較して–」

“Die Merkmale der direktiven Präpositionen im Niederdeutschen
–im Vergleich mit Standarddeutsch–”

高 須 万 祐 子

Mayuko TAKASU

目次

1. はじめに
- 1.1. 低地ドイツ語とは
2. 先行研究
- 2.1. 低地ドイツ語の前置詞に関する主な先行研究
- 2.2. 前置詞の定義
- 2.3. 低地ドイツ語と標準ドイツ語の前置詞の対応範囲の違い
3. 前置詞
- 3.1. 低地ドイツ語の前置詞naを中心に
- 3.2. 標準ドイツ語の前置詞zuを中心に
4. 相関前置詞
- 4.1. 一般的な相関前置詞の定義
- 4.2. Appel (2007) の分類
- 4.3. 相関前置詞の定義の再考
- 4.4. 相関前置詞の調査
- 4.4.1. 標準ドイツ語の前置詞inの用例
- 4.4.2. 相関前置詞の用法における低地ドイツ語と標準ドイツ語の違い
- 4.4.3. 前置詞in以外の用例
- 4.5. 2つ目の不変化詞の機能
5. まとめと展望
- 参考文献

1. はじめに

1.1. 低地ドイツ語とは

低地ドイツ語とは、ドイツ北部の言葉である。低地ドイツ語は7–8世紀に起こったと想定される第二次子音推移（南方の高地ドイツ語ではこのためp, t, kがpf/f, ts/s, chに変化した）に関与しなかったため、今日、英語やオランダ語と多くの特性を共有する。¹

低地ドイツ語は歴史的に古ザクセン語（750～1150年）、中期低地ドイツ語（1150～1600年）、新低地ドイツ語（1600年以降）という推移を辿っている。（Lindow et al. (1998), S.17）年代に関しては、本論文で取り上げる低地ドイツ語は現代1900年代以降の現代低地ドイツ語である。低地ドイツ語には様々な方言が存在する。

また低地ドイツ語には次のような様々な方言が存在する。

<低地ドイツ語の広域方言の分類>（Lindow et al. 1998, S.18,19による）

（東部）メクレンブルクーフォアポメルン語

¹ 河崎(2008, S.39)

- (Mecklenburgisch-Vorpommersch)
 中部ポメルン語 (Mittelpommersch)
 メルキッシュブランデンブルク語
 (Märkisch-Brandenburgisch)
 (西部) 東ファーレン語 (Ostfälisch)
 西ファーレン語 (Westfälisch)
 北部低地ザクセン語
 (Nordniedersächsisch)

更に、以下のように北部低地ザクセン語は細かく区分することが出来る。

- <北部低地ザクセン語の下位方言>
 東フリースラント方言 (Ostfriesisch)
 エムスラント方言 (Emsländisch)
 ブレーメン - オルデンブルク方言
 (Bremisch-Oldenburgisch)
 ハンブルク方言 (Hamburgisch)
 ホルシュタイン方言 (Holsteinisch)
 シュレースヴィヒ方言 (Schleswigsch)

2. 先行研究

2.1. 低地ドイツ語の前置詞に関する主な先行研究

本論文で主に参考にしてしている低地ドイツ語の統語や前置詞に関する参考文献を以下に挙げる。

Appel (2007) では低地ドイツ語の統語的特徴が体系的に研究されている。その中でも格の統合により格体系が弱化し、与格・対格の区別が失われた低地ドイツ語において、標準ドイツ語で与格・対格支配の区別がある前置詞はどのような表現で示されるか、に言及している部分に注目した。大体のものは動詞によって意味の区別は可能であると記述があ

るが、そうでない場合は補足的な表現が存在するとしており、3通りの補足的な表現²が紹介されている。ただ、この3通りの表現の中の使い分けなどには特に触れていない。

Stellmacher (1990, S.210) では低地ドイツ語の前置詞が標準ドイツ語の前置詞とは対応範囲が違うことについて記している。しかしながら、一部の前置詞しか扱っておらず、多くの前置詞について記述があるわけではないため、前置詞についての説明を体系的に行っているわけではない。

また、Saltveit (1983) では低地ドイツ語の属格や与格について言及している。低地ドイツ語の属格や与格などの格や前置詞についての記述自体は少なくはない。しかしながら、この先行研究における問題点は、提示されている用例が低地ドイツ語の中の一方言である西ファーレン語を用いているものが多く、低地ドイツ語、特に本論文で調査対象として多く取り上げている北部低地ザクセン語などにも当てはめることができるものであるか、という点である。この点についての記述は見当たらなかった。

主にこれらの先行研究を参考にし、本論文の作成にあたった。

2.2. 前置詞の定義

ここでは一般的に格体系が弱化すると発達するものの一つに挙げられている前置詞について考察する。前置詞の中でも特に、低地ドイツ語に与格・対格の区別が存在しないことから場所・方向に関する前置詞、つまり標準ドイツ語において与格・対格のどちらも支配する前置詞について取り上げる。

低地ドイツ語は前述した通り、格体系が標準ドイツ語に比べて弱化している。そして、それを補う働きをするものの一つが前置詞であると考えられる。そのため標準ドイツ語に

² Appel (2007) によれば、3通りの補足的な表現とは1) 後置詞の添加、2) 古い冠詞の与格の形、3) 意味的により明白な他の前置詞による代用、である。

比べて前置詞が多用され、発達しているのではないかと想定できる。つまり、低地ドイツ語の方が前置詞の数が多く、個々の表現範囲が狭いのではないかと考えられる。

本論文では「前置詞」「後置詞」「相関前置詞」という語を用いる。その位置に関わらず、これら3つの上位概念としても「前置詞」という語が使われることもある。そのため、ここでは「前置詞」という術語を、上位概念としての「前置詞」の意味でも使用する場合があるが、ほとんどの場合その下位分類に含まれる「後置詞」「相関前置詞」と同等の意味で用いている。

一般的には、Klaus (1999) にもあるように「前置詞」という術語は厳密には前置される場合にのみ使用されることが正しく、後置される場合は「後置詞」、2つの部分から成る *um...willen* のような構成要素は「相関前置詞」と見なされる。歴史的に、この3つの術語は「前置詞」の下にまとめられてきた。しかしながら、部分的に「前置詞」という標示は上位概念として用いるのではなく、「後置詞」や「相関前置詞」とともに同じ階級の概念としての区別に使用される。

一方 Götze/Hess-Lüttich (1989)³ は上位概念として「前置詞」という術語を使用している。そして後置詞は下位範疇を形成しており、後の位置に置かれる場合は術語「後置詞」が正確であろうと言及している。「前置詞」は前置詞として前に置かれた構成要素と後置詞として後ろに置かれた構成要素を表わしている。しかしながら *um...willen* のような「分けられた前置詞」としての形式を表わす時、その「前置詞」という術語の表わす意味は不安定なものであると考えられる。その他の両方

の術語（前置詞、後置詞）が明らかに位置において標示されるのに対して「分けられた前置詞」という標示は混合のタイプを表わしている。この「分けられた前置詞」という標示において、その前の前置詞にも、上位概念としては後ろの後置詞にも「前置詞」という語を意味することに用いることが出来るため、標示が複雑になってしまう。それゆえ Götze/Hess-Lüttich (1989)⁴ には *um...willen* のような位置のものに関しては「相関詞」という標示が適切であろうとの記述が見られる。しかしながら、詳細な定義は後述するが、本論文では「相関詞」に関しては明らかに前置詞由来ではないものは除外して考えるため、「相関詞」ではなく「相関前置詞」という術語の方が適切であると考えられる。そのため、以降この用語を使う。この「相関前置詞」に関しての定義などは後述する。

このように「前置詞」という術語の概念は、様々に意見は分かれているものの、本論文では「前置詞」という上位概念を念頭に置きつつ、その下位範疇として前置詞、後置詞、相関前置詞を置きたいと考えている。

前述した通り、低地ドイツ語は格体系が弱体化しているために、他の要素が発達していると考えられ、その一つであると想定される前置詞に注目し、標準ドイツ語で前置詞の前に置かれる与格・対格の格で区別していた場所や移動といったものは、どのように区別されるのかも考察していく。

2.3. 低地ドイツ語と標準ドイツ語の前置詞の対応範囲の違い

まず、低地ドイツ語と標準ドイツ語の前置詞の対応範囲の違いについて考察する。低地ドイツ語の前置詞が標準ドイツ語の前置詞にそのまま対応しているわけではない。低地ドイツ語の前置詞が格の弱化の影響を受けて発

³ Klaus (1999, S.121-122) による。しかしながらその著書の中では非統一性が確認されている。

⁴ Kalus (1999, S.121-122) による。

達したものと考えるのならば、標準ドイツ語に比べて前置詞の数が多く、1つの前置詞の表す意味範囲が狭いのではないかと想定できる。

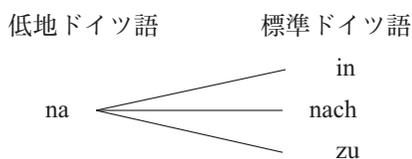
次に、低地ドイツ語の前置詞naと標準ドイツ語の前置詞zuを中心に考察する。それぞれの言葉から一つずつ前置詞を選んだ理由は低地ドイツ語の前置詞のみを中心にして考えると、低地ドイツ語の前置詞の対応範囲が客観的に標準ドイツ語よりも狭いのかということを理解し難いためである。

3. 前置詞

3.1. 低地ドイツ語の前置詞naを中心に

例えば低地ドイツ語の前置詞naを中心に考えると、それぞれの前置詞の対応は下記の(図1)のようになる。

(図1) 低地ドイツ語の前置詞naと標準ドイツ語の前置詞との対応関係⁵



Lindow et al. (1998, S.224) では、na-nach, na-zuの使い分けについて以下のように分類している。⁶

①同行者を伴う名詞の前(～と一緒に)…標準ドイツ語 zu

- (1) Nd. Se föhrt **mit em na siene School.**⁷
 (2) Sd. Sie fährt **mit ihm zu seiner Schule.**

⁵ Lindow et al.(1998, S.224) を参考に作図。
⁶ 以下の(1)~(12)の用例はLindow et al. (1998, S.224) による。日本語訳は筆者。
⁷ 以下では低地ドイツ語の用例をNd., 標準ドイツ語の用例をSd.と標示していく。

「彼女は彼と共に彼の学校へ行く。」

②同行者を伴わない名詞の前…標準ドイツ語 nach

(3) Nd. Ik gah **na Huus.**

(4) Sd. Ich gehe **nach Hause.**

「私は家へ帰る。」

③代名詞の前…標準ドイツ語 zu

(5) Nd. Vundaag kümmt he wedder **na us.**

(6) Sd. Heute kommt er wieder **zu uns.**

「彼は今日再び私たちのところへ来る。」

④地名の前…標準ドイツ語 nach

(7) Nd. He föhrt **na Hamborg** hen.

(8) Sd. Er fährt **nach Hamburg.**

「彼はハンブルクへ行く。」

(9) Nd. Düssen Sommer föhrt se wedder **na Italien.**

(10) Sd. Diesen Sommer fahren sie wieder **nach Italien.**

「この夏に彼らは再びイタリアへ行く。」

⑤人を表す名詞の前…標準ドイツ語 zu

(11) Nd. He leep **na Antje.**

(12) Sd. Er lief **zu Antje.**

「彼はAntjeのところに走った。」

これら①~⑤の内容をまとめると、次の(表1)のようになる。

(表1)

zuの場合	nachの場合
①同行者を伴う名詞の前	②同行者を伴わない名詞の前
③代名詞の前	④地名の前
⑤人を表す名詞の前	

「低地ドイツ語の方向を表す前置詞の特徴 —標準ドイツ語と比較して—」(高須万祐子)

以上のことから na-zu と na-nach のそれぞれの分類において、na-zu には“人が関係するとき”，反対に na-nach では“人が関係しないとき”に用いられるのではないか，という仮説が立てられる。

3.2. 標準ドイツ語の前置詞 zu を中心に

次に標準ドイツ語の前置詞 zu を中心に標準ドイツ語，低地ドイツ語の対応関係を見ていく。Stellmacher (1990, S.210) によれば標準ドイツ語の前置詞 zu は，①向格 (direktiv)，②結果的な位格 (resultativ-lokativ)，③位置的な位格 (positional-lokativ)，の 3 つの意味の範囲に区別される。⁸

(13)①Er läuft zum Markt. 「彼は市場へ走っていく。」

(14)②Er kam zu Hause an. 「彼は帰宅した。」

(15)③Er war zu Hause. 「彼は家にいた。」

そして低地ドイツ語においては向格の描写に関しては前置詞 na が使用され，添加語で動詞の方向が強調される。

(16) He löppt na'n Markt hen. 「彼は市場へ走っていく。」

しかし，目的地での働きに焦点を当てている場合は to がふさわしいとされ，この場合，例えば前述の例の市場を目的地にした場合は (17) He geht to Markt. という文の方がふさわしいと考えられる。というのも，市場での物の売買という働きを含めていると考えられるためである。また結果的な位格の意味は次のように，同じく前置詞 na で表現される。

(18) He keem na Huus. 「彼は帰宅する。」

最後に低地ドイツ語において，位置的な位格を表現するのに前置詞 to や in を用いる。その際，前置詞 in は具体的な添加語 (eine konkrete Angabe) と共に使用するのに用いられる。

以上のことから低地ドイツ語，標準ドイツ語の対応関係は (図 2) のようになる。

(図 2)



ここまで低地ドイツ語の前置詞 na と標準ドイツ語の前置詞 zu を中心に前置詞の対応範囲の違いを見てきて，それぞれの言葉において前置詞の対応範囲が違っていることは明らかであったが，特別に低地ドイツ語の前置詞の数が標準ドイツ語の前置詞よりも多いということはないと考えられる。

4. 相関前置詞

3章で比較した前置詞においては低地ドイツ語，標準ドイツ語の間に対応範囲の差はあるものの，格体系の弱化している低地ドイツ語の方が前置詞の多様性があるというわけではなさそうである。次に，この章では相関前置詞に関して考察していく。それは低地ドイツ語において標準ドイツ語以上に前置詞が発達していなくても，何か他の語などを共に用いることによって表現の多様性を図っている可能性もあると考えられるためである。

⁸ 以下の(13)-(18)の用例はStellmacher (1990, S.210) による。日本語訳は筆者。

4.1. 一般的な相関前置詞の定義

ここで相関前置詞の定義について述べておく。一般的に相関前置詞は『ドイツ言語学辞典』によれば、「2重の不変化詞」と定義されている。日本の一般的な独和辞典などでは、um…willen, von…anなどを見つけることができる。Appel (2007)によれば、Duden文法においては、一方では前置詞ではvon-anを挙げ、しかし他方ではvon Jugend auf, zur Schweiz hinなどと共に副詞によって強調された前置詞構造と呼ばれているような例に並んでvon Kind anもある、としている。

4.2. Appel (2007) の分類

Appel (2007, S.77-81) では、次のように相関前置詞の分類と広義での相関前置詞の分類がなされている。

【相関前置詞の分類】

- (1) 狭義での相関前置詞は、まとまってのみ動かせる、そしてその際に両方の構成要素を交換できないもの (um…willen)
- (2) 後置される前置詞は、もしかしたら前置される前置詞を伴って一緒に相関前置詞を発生させるもの
- (3) 分離動詞の分離前綴り
- (4) 修飾された副詞のような非抱合変種が共存するもの

この分類において、(3)と(4)の違いは、構成要素が動詞と結びつくか、結びつかないかの違いで判断されると述べられている。

【広義での相関前置詞の分類】

- (1) 本来の相関前置詞 von-anのようなもの
- (2) 前置詞と同音異義のもの
- (3) 副詞の特別なタイプ

この分類において、(2)(3)の間にはいつもはっきりした境界があるわけではない、とAppel (2007) は述べている。

4.3. 相関前置詞の定義の再考

ここで、独自に相関前置詞の定義をしたい。下記のように、複合前置詞と相関前置詞は区別する。また、相関前置詞の中でも分類をしていく。Appel (2007) は、一般的に相関前置詞として有名なum…willenは相関前置詞とは捉えない。なぜならば、このwillenは名詞Willeに由来するものであり、現在でも名詞であったという名残をよく残しているために、前置詞とは捉えにくいと考えられる。他の例では、anstattなども、はっきり名詞由来のものであると考えられるため、相関前置詞の分類からは除外するべきであると考えられる。残るのは、このようなもの以外の「前置詞…+後置詞」、「前置詞…+副詞」という形である。しかしながら、後置詞と副詞の境界は難しく、区別のつかないものも存在する。そのため、この後置される不変化詞を特に区別しない。

①複合前置詞 (前置詞句)

相関前置詞+名詞 (不変化詞+名詞+不変化詞)

im Vergleich zu (mit) のようなもの

②相関前置詞

um…willen anstatt

willen, stattは名詞に由来。umは与格支配だが、この場合、属格が後ろに続く。この属格支配はwillenから受けているものである。そのため、このような名詞由来とはっきりわかるものは除外するべきである。

前置詞…後置詞

前置詞…副詞

▶動詞の前綴りではない副詞

例) von Kindheit an 子供のときから
▶動詞の分離前綴りとしての副詞

4.4. 相関前置詞の調査

4.4.1. 標準ドイツ語の前置詞inの用例

この節における低地ドイツ語と標準ドイツ語の比較対象は聖書とした。新約聖書の『マタイによる福音書』、『マルコによる福音書』を対象にしている。使用した聖書は低地ドイツ語の聖書2冊(Muuß, Rudolf (1984) “Dat Niee Testament”, Jessen, Johannes (1980) “Dat Ole un dat Nie Testament”), 標準ドイツ語の聖書 (Evangelisches Bibelwerk, Katholisches Bibelwerk (1967) “tetrapla 1964”), 日本語の聖書 (『聖書』新共同訳 (1998)) である。

低地ドイツ語の用例収集には上記の2つの聖書を採用している。Muußの聖書において後置詞としての不変化詞が添加されているものは、Jessenの聖書においてどのように表現されているのかを調査するためである。基本的にはJessenの聖書よりもMuußの聖書を優先する。なぜならばJessenの聖書はJessen個人が訳しているが、Muußの聖書はMuußを含める4人が翻訳に関わっている。一般的に一人だけの訳者よりも多くの訳者がいる方が訳者個人の言語使用に偏らないために、翻訳における個人差が薄まり、用例の調査により適していると考えられるためである。Muußの聖書では北部低地ザクセン語の中のホルシュタイン方言が用いられている。この聖書の序文に「この方言が低地ドイツ語圏において人々によく理解されるからである」と理由が記されている。

またJessenの聖書も複数語尾の形が-(e)tである為、ホルシュタイン方言を用いていると考えられる。

そして標準ドイツ語の聖書, “tetrapla

1964”にはルター派, スイス改革派, ローマ・カトリック派, イギリス国教会派, 4種類の聖書が記載されている。ドイツ北部の低地ドイツ語圏ではルター派のEvangelischが広まっているため、本論文ではルター派の部分を使用した。

以下に挙げる用例は、標準ドイツ語において方向を表す対格支配の前置詞inの際に、低地ドイツ語(北部低地ザクセン語のホルシュタイン方言)において前置詞inや他の前置詞が用いられ、なお且つ後置詞としての不変化詞が見られたものである。以下の用例で見られる後置詞としての不変化詞は、Appel (2007, S.84) が指摘しているように、動詞などで場所・方向の意味の区別がつかないものの補足表現であると考えられるが、以下に用例を挙げながら具体的に検証していきたい。

<用例>

用例は低地ドイツ語のMuußの聖書, Jessenの聖書, 標準ドイツ語, 日本語の新共同訳聖書の順番に並べている。それぞれ行き先(以下の①~⑤)によって分類した。それから動詞などを調査していく。

以下, Muußの聖書: Muuß, Jessenの聖書: Jessen, 標準ドイツ語: Sdと記し, 日本語の共同訳聖書は括弧(「」)をつける。

①家

マタイ2-11

(39) Muuß: Un se gängen rin in dat Huus un seegen dor dat Kind mit sien Mudder Maria; (そして彼らは家に入っていく, そこで母マリアと共にいる幼子を見た)

(40) Jessen: Un se güngn in dat Hus rin un kreegn dat Kind mit sin Moder Maria to sehn (そして彼らは家の中に入っていく, 母マリアと共にいる幼子を見つけた)

(41) Sd: und gingen in das Haus und fanden das Kindlein mit Maria, seiner Mutter,

(そして家の中に行き、彼の母マリアと共にいる幼子を見つけた)

(42) 「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた」

マタイ 8-14

(43) Muuß: Un denn güng Jesus in Petrus sien Huus rin.

(そしてそれからイエスはペトロの家に入っていた)

(44) Jessen: As Jesus nu in Petrus sin Hus käm

(イエスがペトロの家に行った時)

(45) Sd: Und Jesus kam in das Petrus Haus

(そしてイエスはペトロの家に行った)

(46) 「イエスはペトロの家に行き、」

マタイ 12-4

(47) Muuß: Do güng he rin in Gott sien Huus (彼が神の家の中に入ってしまったとき)

(48) Jessen: Güng he do nich eenfach in Godd sin Hus,

(その時、彼は簡単には神の国に入れなかったのではないですか)

(49) Sd: wie er in das Gotteshaus ging (彼が神の家の中に行ったとき)

(50) 「神の家に入り、(ただ祭司のほかには、自分も伴の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。)」

マルコ 2-26

(51) Muuß: Do güng he doch in Gott sien Huus rin, -Abia-thar weer to de Tiet Hogepreester-,

(彼は神の家の中へ入った。アビアタルがこの時は大司祭であった。)

(52) Jessen: He güng eenfach rin na Godd sin Hus- Ubjathar wär ja domals Hochepreester-

(アビアタルが大司祭であったとき、彼は彼の家へ入って行った)

(53) Sd: Wie er ging in das Haus Gottes zur Zeit Abjathars, des Hohenpriesters,

(アビアタルが大司祭であったとき、彼は神の家の中に行き、)

(54) 「アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、…」

マタイ 2-11は Muuß, Jessenの聖書ともに不変化詞rinが見られる。この文では動詞がgahn, つまり標準ドイツ語のgehen「(歩いて) 行く」と同義であり、行き先も「家」であることから、この文だけを見る場合は場所と方向の区別がつかない可能性もある。しかしながら、ここでは文脈(占星術の学者たちが星の導きにより、幼子のいる家の中へ入っていくというもの)から文の動作主は家の外にいたことがわかり、前置詞inが移動を表していると分かる。また、この低地ドイツ語rinと同義の標準ドイツ語rein, herein, hineinは標準ドイツ語の用例においては用いられていない。それにも関わらず、低地ドイツ語の2冊の聖書ではrinが見られた。

しかしながらマタイ 8-14, マタイ 12-4では行き先は2-11と同じように「家」であり、Muußでは後置詞が出現しているが、Jessenの聖書では見られなかった。また、動詞も2つの聖書では違っていた。

また、マルコ 2-26は Muuß, Jessenの聖書ともに後置詞が見られたが、前置詞はそれぞれin, naと異なっていた。

②天の国・神の国

マタイ 5-20

(55) Muuß: Wenn dat mit ju Fraamsien nich

beter steiht as bi de Schriftgelehrten un Pharisäers, denn kaamt ji bestimmt nich in't Himmelriek rin!

(もし君たちの敬虔さが律法学者やファリサイ派の人々の義より良くなければ、君たちはきっと天の国に入ることはできない)

(56) Jessen: Denn dat will ick ju seggn: Steit dat bi ju mit de Gerechdikeit nich beter as bi de Schriftgelehrten un Pharisäers, denn kamt ji nich in't Himmelriek.

(私は君たちに次のことを言う：君たちの義が律法学者やファリサイ派の人々の義より良くないならば、君たちは天の国に行くことはできない)

(57) Sd: Es sei denn eure Gerechtigkeit besser als die der Schriftgelehrten und Pharisäer, so werdet ihr nicht in das Himmelreich kommen.

(君たちの義が律法学者やファリサイ派の人々の義より良くなければ、君たちは天の国に行くことはできない)

(58) 「言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさってなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

マタイ7-21

(59) Muuß: Nich jedereen, de to mi seggen deit: >>Herr, Herr!<< kümmt in't Himmelriek rin.

(私に向かって、「主よ、主よ！」と言う者が皆、天の国に入るわけではない)

(60) Jessen: Nich jedereen, de to mi “Herr!” seggt, ward in dat Himmelriek kamen.

(私に向かって、「主よ！」と言う者が皆、天の国に来るわけではない)

(61) Sd: Es werden nicht alle, die zu mir sagen: Herr, Herr! in das Himmelreich kommen.

(私に向かって、「主よ、主よ！」と言う者が皆、天の国に来るわけではない)

(62) 「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。」

マタイ18-3

(63) Muuß: denn kaamt ji öwerhaupt nich in't Himmelriek rin!

(君たちは決して天の国に行くことはできない)

(64) Jessen: denn kamt ji nich in't Himmelriek rin.

(君たちは天の国に行くことはできない)

(65) Sd: so werdet ihr nicht ins Himmelreich kommen.

(君たちは天の国に行くことはできない)

(66) 「(心を入れ替えて子供のようにならなければ、) 決して天の国に入ることはできない。」

マタイ19-23

(67) Muuß: En rieken Mann kümmt doch heel swaar in't Himmelriek rin.

(金持ちが天の国に入るのはとても難しい)

(68) Jessen: dat en rieke Mann in't Himmelriek rinkümmt.

(金持ちが天の国に入ることは)

(69) Sd: Ein Reicher wird schwer ins Himmelreich kommen.

(金持ちが天の国に行くのは難しい)

(70) 「金持ちが天の国に入るのは難しい。」

マルコ10-23

(71) Muuß: Wo swaar kaamt doch de rieken Lüüd nah Gott sien Riek rin!

(財産のある人が神の国に入るのは、なんと難しいことか！)

(72) Jessen: Wo swor is dat doch för de Lüüd,

de veel Geld hebbt, dat se in Godd sin Riek kamt!

(多くのお金を持つ人にとって神の国に行くのは、なんと難しいことか)

(73) Sd: Wie schwer werden die Reichen in das Reich Gottes kommen!

(金持ちが神の国に行くのは、なんと難しいことか!)

(74) 「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」

マタイ5-20, マタイ7-21の用例ではMuußの聖書では後置詞rinが用いられているが, Jessenの聖書では用いられていない。マタイ18-3の用例は低地ドイツ語の聖書2冊ともに後置詞rinが使用されている。マタイ19-23のJessenの用例ではrinは分離動詞の前綴りと考えられるが, 意味的には動詞と結びついていない場合とさほど差はないと考えられる。また, 動詞はkommen「来る, 行く」, hereinkommen「入ってくる」であるが, 行き先が「天の国」であり元からその場所にいるとは考えられないため移動であるということが分かる。マルコ10-23ではMuußの聖書では前置詞nahと後置詞rinを用いているが, Jessenの聖書では前置詞inを使用している。この用例も行き先から移動の意味であると分かる。

③神殿

マタイ21-12

(75) Muuß: Un denn güng Jesus rin in den Tempel,

(そしてそれからイエスは神殿の中に入って行き,)

(76) Jessen: Un nu käm Jesus na'n Tempel rin
(そしてそれからイエスは神殿へ入って行き,)

(77) Sd: Und Jesus ging in den Temple hinein
(そしてイエスは神殿の中に入って行き)

(78) 「それから, イエスは神殿の境内に入り,」

マタイ21-12では標準ドイツ語においてhineinという不変化詞が用いられているため, 同じ意味のrinを用いている低地ドイツ語と同じ構造になっている。

マタイ27-5

(79) Muuß: Do smheet he dat Geld in'n Temple rin, un denn güng he weg un hung sik op.

(そこで彼はお金を神殿の中に投げ入れ, 立ち去り, 首をつった)

(80) Jessen: Do smheet he de Dalers in den Tempel rin un güng hen un hung sick up.

(そこで彼はお金を神殿の中に投げ入れ, 立ち去り, 首をつった)

(81) Sd: Und er wart die Silberlinge in den Tempel, hob sich davon, ging hin und erhängte sich selbst.

(そして彼は銀貨を神殿の中に投げ, そこから立ち上がり, 立ち去り, そして首をつった)

(82) 「そこで, ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り, 首をつって死んだ。」

④都

マタイ26-18

(83) Muuß: He sä: >>Gaht nah de Stadt rin to en gewissen Mann un seggt:...

(彼は言った。「都のあの男性のところに行って言いなさい:…」)

(84) Jessen: He sä: “Gaht to Stadt to den un den un seggt em:...

(彼は言った。「都の彼のところに行き行って言いなさい:…」)

(85) Sd: Er sprach: Gehet hin in die Stadt zu einem und spricht zu ihm:...

(彼は言った。「都のあの人のところに行き

て彼に言いなさい：…」]

(86) 「イエスは言われた。「都のあの人のところに行ってこう言いなさい。」

マタイ28-11

(87) Muuß: As de Fruuens noch ünnerwegens weren, do kemen en poor Wachlüüd nah de Stadt rin un mellen de Hogenpreesters allens, wat passeert weer.

(婦人たちがまだ外出の途次にあるとき、数人の番兵は都へ行き、祭司長に起きたこと全てを伝えた)

(88) Jessen: As se nu wiedergüngn, do kämen en poor Lüid vun de Wach na de Stadt rin un meld'ten de Hohepreesters allns, wat dor passeert wär.

(彼らが外出の途次にあるとき、数人の監視の人々は都へ行き、祭司長に起きたこと全てを伝えた)

(89) Sd: Da sie aber hingingen, siehe, da kamen etliche von den Hütern in die Stadt und verkündeten den Hohenpriestern alles, was geschehen war.

(しかし彼らが行く時、見て、数人の番兵は都へ行き、祭司長に起きたこと全てを知らせた)

(90) 「婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した。」

③, ④の用例も行き先や文脈から移動の意味であると推測することが出来る。またMuuß, Jessenの聖書において使用されている前置詞にも多少の違いは認められた。

⑤その他

マタイ6-6

(91) Muuß: Du, wenn du beden deist, denn

gah rin in dien Kamer

(君、君が祈るとき、君の部屋の中に行つて)

(92) Jessen: Wullt du mal beden, denn gah du in din Kamer rin

(君が祈りたいとき、君は君の部屋の中に行つて)

(93) Sd: Wenn du aber betest, so gehe in dein Kämmerlein

(でももし君が祈るとき、君の部屋に行つて)

(94) 「だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入つて」

マタイ6-6ではMuußの聖書ともJessenの聖書とも不変化詞rinが置かれている。しかしながら、文脈から移動を表しているとは理解でき、また標準ドイツ語にもhereinなど同義の語は見られない。

マタイ8-32

(95) Muuß: Do fohren se ut de Minschen rut un in de Swien rin.

(そこで彼らは人々から出て、豚の中に入った)

(96) Jessen: Do güngn se aff un fulln öwer de Swien her.

(そこで彼らは出て、豚の上へと落ちた)

(97) Sd: Da fuhren sie aus und fuhren in die Säue.

(そこで彼らは出て、雌豚の中に入った)

(98) 「(イエスが、『行け』と言われると,) 悪霊どもは二人から出て、豚の中に入った。」

マタイ8-32では、低地ドイツ語の2冊において使用されている前置詞が異なっている。Jessenの聖書の前置詞öwerは標準ドイツ語überにあたる語であり、不変化詞herは標準ドイツ語でも同義である。

マタイ12-9

(99) Muuß: Denn güng Jesus wieder un keem in ehr Synagog rin.

(それからイエスは先へ進み、シナゴグの中へ入って行った)

(100) Jessen: As he vun dor wieder güng, käm he in ehr Kapell.

(それから彼は先へ進み、礼拝堂の中へ行った)

(101) Sd: Und er ging von dannen weiter und kam in ihre Synagoge.

(そして彼はそこから先へ進み、シナゴグの中へ行った)

(102) 「イエスはそこを去って、会堂にお入りになった。」

マタイ14-32

(103) Muuß: Un denn steegen se beid in't Boot rin, un de Storm legg sik.

(そしてそれから二人がボートに乗り込むと、嵐はおさまった)

(104) Jessen: Un denn güngn se beide int Schipp. Do lä sick de Wind.

(そしてそれから二人が船の中に行った。風が静まった)

(105) Sd: Und sie traten in das Schiff, und der Wind legte sich.

(そして彼らが船に入ると、風は静まった)

(106) 「そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。」

マタイ12-9、マタイ14-32では、Muußの聖書では後置詞rinが用いられているがJessenの聖書では用いられていない。

マルコ14-54

(107) Muuß: Un vun wieden güng Petrus achter em ran, ok mit rin in Hogenpreester

sien Hofplatz.

(そしてペトロは大祭司の屋敷の中庭の中までも、遠くから彼の後ろについて来た)

(108) Jessen: Un Petrus folg vun wieden mit lang achter em ran, un so käm he bit an den Hohenvreester sin Hofstäd.

(そしてペトロは遠くから彼に従った、そして大祭司の屋敷の中庭まで来た)

(109) Sd: Petrus aber folgte ihm nach von ferne bis hinein in des Hohenpriesters Palast

(しかしペトロは大司祭の屋敷の中まで遠くから彼に従った)

(110) 「ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、…」

マルコ14-54でも文脈から移動であると分かる。またJessenの聖書においてはinやnahという前置詞は使われていない。その代わりにbit an (=bis an)と表現されている。

マルコ16-5

(111) Muuß: Un denn güngen se in de Graffkamer rin un segen,

(そしてそれから彼らは墓の部屋の中に入って行き、祝福した)

(112) Jessen: Un nu güngn se rin na dat Graff, un wat bilewten se?

(そしてそれから彼らは墓へ入って行き、そして何を彼らは信じた?)

(113) Sd: Und sie gingen hinein in das Grab (そして彼らは墓の中に入って行った)

(114) 「墓の中に入ると、(白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。)」

マルコ16-5も文脈から移動であると分かる。また、Muuß, Jessen, 標準ドイツ語の聖書ともに不変化詞rin, hineinが見られた。

これらの用例で注目すべき点が3点ある。まず第1に低地ドイツ語の用例内において動詞のみで場所・移動の意味が区別できるものか、という点である。第2に区別が出来ない場合でも文脈から場所・移動の意味の区別ができるのかという点である。そして第3に低地ドイツ語で *rin* などの不変化詞が用いられている場合に、標準ドイツ語においても同義の副詞が見られるのか、という点である。例えば低地ドイツ語において *rin* が見られた場合に、標準ドイツ語においても同義の *hirein* などの語が見られればこの用例は何も特別なものではない。しかしながら標準ドイツ語で対応する語が用いられておらず、且つ低地ドイツ語内での文脈から場所・方向の意味の区別が可能な場合でも、不変化詞(後置詞)が付加される場合には単なる補足的な表現や、翻訳が同じであるというだけでないことが分かる。その場合は、移動を強調していると考えられる。

これらの用例に鑑みると、後置詞として付加されている不変化詞(*rin*, *rut*といったもの)は、Appel (2007) が言及しているような、標準ドイツ語においては与格・対格で区別しているような場所・移動の意味の区別の単なる補助的役割を担っているだけではないとわかる。なぜならば、動詞だけでなくとも、こういう「書物」では前(後)の文脈から移動を伴ったものであるのか、違うのかが推測されるためである。そのため、このような後置詞として置かれる不変化詞は単なる補足的な表現としての役割のためだけに用いられているわけではない。それでは、どうしてこのような語が必要なのだろうか。

この低地ドイツ語の *rin/ rut* というような語は標準ドイツ語においては *rein*, *herein*, *hinein* / *raus*, *heraus*, *hinaus* に対応している。

これらの語はそれだけで移動する方向を表現している。そのため、文脈などから場所か移動のどちらを表現しているか明確な場合でも、このような語を用いるということは単なる意味の区別の補助ではなく、方向の強調であると考えられる。

そして用例から、低地ドイツ語内にも後置詞としての不変化詞を添加する、しないの揺れがあることが *Muuß* と *Jessen* のそれぞれの聖書の用例から明らかである。そして、このような語の置かれる位置についてもこの2冊では違いが見られた。特に *Muuß* の聖書では不変化詞が後置されずに前置詞 *in* の前に置かれることがあった。しかしながら、不変化詞が後置されるものと前置されるものとの間で意味の違いがあるとは考え難い。

また前述した相関前置詞の定義においても述べたが、文末に後置される不変化詞は分離動詞の前綴りであるのか、動詞との繋がりは無いものであるのか、この区別は出来かねる。

4.4.2. 相関前置詞の用法における低地ドイツ語と標準ドイツ語の違い

広義での相関前置詞の3分類内の「本来の相関前置詞」とされる *von-an*, *von-aus* のようなもの以外において、抜き出した用例から低地ドイツ語において前置詞 *in* を用いるときには *rin* や *rut* といった後置詞としての不変化詞が用いられることがわかる。これは Appel (2007) によれば場所・方向の意味の区別の補助的な役割として添加されるもの、とされているが、それならば動詞や文脈などで意味の区別が出来る場合はこのような後置詞の添加は必要ないのではないかと考えられる。この低地ドイツ語の *rin*, *rut* という語は前述した通り標準ドイツ語の *rein*, *herein*, *hinein* / *raus*, *hinaus*, *heraus* に対応している。そのため、このような語が置かれていても特別なことで

はない。それでも標準ドイツ語においてこのような語が用いられていなくとも低地ドイツ語においては用いられるということから、低地ドイツ語においては場所・方向の意味の区別に関わらず、このような語が標準ドイツ語よりも多く用いられているということがわかる。

4.4.3. 前置詞in以外の用例

低地ドイツ語の文法書SAAS (2011, S.306, 307) には、このような相関前置詞のような用いられ方をする前置詞と2つ目の不変化詞の用例を挙げている。その中で後置される不変化詞が前置詞と同じ形にherを付加したものがあ⁹。上記の聖書の用例の前置詞inと後置される不変化詞rinの組み合わせもその1つに当たる。

上の節では標準ドイツ語の方向を表す対格支配の前置詞inの場合に低地ドイツ語でどのように表現されているか、前置詞と後置詞の組み合わせを用例として挙げた。この節では低地ドイツ語の前置詞in以外の前置詞と後置詞を調べる。

使用したのは先程と同じ聖書のマタイによる福音書の1～16章とした。ここではSAAS (2011) でもあるように、“前置詞+r+前置詞と同じ形の不変化詞(意味はher-と同様)”の組み合わせのものが多く見つかった。以下、用例を①低地ドイツ語の両聖書とも同じ前置詞+後置詞のもの、②違う前置詞+後置詞のもの、③一方が前置詞+後置詞のもの、3つに分類した。

<用例>

①Muußの聖書とJessenの聖書、両方で同じ前置詞+後置詞を用いているもの

⁹ 例えばan...ranのようなものである。このranはheranに由来する。

マタイ4-3

(115) Muuß: Do maak de Düwel sik an em ran un sä:

(誘惑者が彼のところに来て言った)

(116) Jessen: Un nu mak sick de Versöker an em ran un säto em:

(そして誘惑者が彼のところに来て言った)

(117) Sd: Und der Versucher trat zu ihm und sprach:

(そして誘惑者が彼のところに来て言った)

(118) 「すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。」

マタイ7-15

(119) Muuß: Wahrt ju vör de Lögenpropheten! De maakt sik in'n Schaapsfell an ju ran, awers binnenin sünd se wille Wülf.

(偽預言者に注意なさい！彼らは羊の皮を身にまとして君たちのところに来るが、その内側は狼である。)

(120) Jessen: Nehmt ju in acht vör de Lögenpropheten! Se makt sick an ju ran in'n Schaapspelz, awer vun binnen ansehen sünd se Wülf,...

(偽預言者に注意なさい！彼らは羊の皮を身にまとして君たちのところに来るが、その内側は狼である。)

(121) Sd: Sehet euch vor vor den falschen Propheten, die in Schafskleidern zu euch kommen, inwendig aber sind sie reißende Wölfe.

(偽預言者に注意なさい、彼らは羊の皮を身にまとして君たちのところに来るが、その内側は貪欲な(肉食の)狼である。)

(122) 「偽預言者を警戒なさい。彼らは羊の皮を身にまとしてあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。」

上の二つの用例はどちらもMuußの聖書, Jessenの聖書ともに全く同じan...ranが用いられている。

②Muußの聖書とJessenの聖書, 両方が違う前置詞+後置詞を用いているもの

マタイ3-5

(123) Muuß: Do gängen de Lüüd ut Jerusalem un ut ganz Judäa un ut de Gegend an'n Jordan to em rut.

(そこでエルサレムとユダヤ全土, ヨルダン川沿いの地方から人々は彼のところに行った)

(124) Jessen: Do wanner to em rut Jerusalem un gans Judäa un allns, wat dor wahnt üm den Jordan rüm.

(そこでエルサレムとユダヤ全土から, ヨルダン川の周辺に住むすべてが彼のところに移動した)

(125) Sd: Da ging zu ihm hinaus die Stadt Jerusalem und das ganze jüdische Land und alle Länder an dem Jordan

(そこで彼のところにエルサレムとユダヤ全土, ヨルダン川沿いの全ての地域から行き)

(126) 「そこで, エルサレムとユダヤ全土から, また, ヨルダン川沿いの地方一帯から, 人々がヨハネのもとに来て,」

マタイ3-5ではMuußの聖書とJessenの聖書は文の作りや意味はやや異なっている。Muußの聖書では文末の後置詞rutは動詞gängenと結びついている可能性もあり, また前の前置詞utと共起しているようにも考えられる。それに比べJessenの聖書において後置詞rümが結びついているのは動詞wahntや前置詞ümである。ただ標準ドイツ語のhinausに対応する語がMuußの聖書ではut, Jessenの聖書ではrutと低地ドイツ語のどちらの聖書にも見られる。

③Muußの聖書とJessenの聖書, どちらかが前置詞+後置詞を用いているもの

マタイ14-29

(127) Muuß: Un denn steeg Petrus ut dat Boot rut un gäng ok öwer't Water op Jesus to.

(そしてそれからペトロは舟から出て, 同じように水の上を歩き, イエスの方へ来た)

(128) Jessen: Un Petrus kladder ut dat Boot, gäng ock richdi öwer dat Water un käm hen to Jesus.

(そしてペトロは舟から出て, 同じように水の上を歩き, イエスの方へと来た)

(129) Sd: Und Petrus trat aus dem Schiff und ging auf dem Wasser und kam auf Jesus zu.

(そしてペトロは舟から出て, 水の上を歩き イエスの方へ来た)

(130) ペトロは舟から降りて水の上を歩き, イエスの方へ進んだ。

マタイ14-29では標準ドイツ語aus, 低地ドイツ語utと対応する前置詞を使用しているが, Muußの聖書ではさらに後置詞rutが用いられている。

マタイ15-29

(131) Muuß: Un dor steeg he op en Berg un sett sik dal.

(そして彼は山に登り, 座った)

(132) Jessen: Hier gäng he up den Barg rup un blew dor en Tiedlang.

(そして彼は山の上に行き, 長いこと座っていた)

(133) Sd: ...und ging auf einen Berg und setzte sich allda.

(そして彼は山の上に行き, そこに座った)

(134) 「そして, 山に登り座っておられた。」

このマタイ15-29では, 低地ドイツ語の聖

書ではそれぞれ前置詞op/upを用いている。これは両方とも標準ドイツ語のaufの意味である。また動詞はそれぞれ標準ドイツ語のsteigenとgehenに対応するものを使用している。Jessenの聖書では後置詞rupが用いられているが、これは動詞hinaufgehen（歩いて上る）の前綴りであると考えられる。

MuußとJessenの聖書を比較してみると、同じ箇所にも必ずしも同じように前置詞と後置詞が用いられるというわけではなかった。しかしながら、一方の聖書で「前置詞+後置詞（不変化詞）」が見られる箇所において、他方では、同じ前置詞と後置詞ではなくても、かなり多く前置詞や「前置詞+後置詞（不変化詞）」が見られた。

4.5. 2つ目の不変化詞の機能

用例を調査して考えられることは、前述した相関前置詞の定義を更に細かく分ける必要があるということである。相関前置詞の後置詞として置かれる前置詞や副詞は特に区別しないと4.3.で述べたが、結果的には標準ドイツ語におけるvon-an, von-ausというようなグループとin-herein, in-hineinというようなグループを分けるべきであると考えた。なぜならばvon-an, von-ausに関しては後置詞an, ausは上位概念としての前置詞であるのに対し、in-herein, in-hineinに関しては後置詞herein, hineinは副詞であり、分離動詞の前綴りである場合もあり、これらの後置詞はinの中に含まれる方向の働きを強調する不変化詞であるからである。

低地ドイツ語において方向を表す前置詞inを用いる際に後置詞としてのrinやrutのような不変化詞を共に用いる表現は聖書の用例からも標準ドイツ語よりも多く見られるものであると言える。このことは低地ドイツ語にお

いて与格・対格の区別が消失した代替として生じた補足的な表現として用いられていることから容易に想像できたことである。また、この後置される不変化詞は方向や移動を表わすことに深く関わっていると考えられる。このように多用されていることを踏まえると単に“補足”の表現ではなく、前置詞と共に起する相関前置詞として捉えることも出来るのではないかと考えられる。ただ、相関前置詞の定義は曖昧である。そのため、本論文では低地ドイツ語では「相関前置詞」が多く見られるということに関しての言及は避けるべきであるが、このような文末に置かれる後置詞としての不変化詞が、単なる補足的な表現として用いられるのではなく、文脈や動詞から場所又は方向・移動のどちらかが判断できるかどうかに関わらず、移動の意味を強めていると言えるのではないか。そして、この表現は標準ドイツ語よりも多用されていると考えられる。

5. まとめと展望

本論文で行った調査から、低地ドイツ語は標準ドイツ語に比べて、前置詞の多様性は特に変わらないが、後置詞（後置される不変化詞）の使用が多いのではないかと考えられる。しかしながら相関前置詞の定義は曖昧である。本論文では後置詞は「後置される不変化詞」であると定義し、動詞との結びつきなどは特に規定しなかったため、かなり多くのものが見つかった。また後置されていない不変化詞も見られた。その中でも特にin-rin, ut-rutのような、「前置詞+後置詞（r+前置詞と同じ形）」の組み合わせが多く見られ、これが標準ドイツ語と差異のある部分であると確認できた。ただ文脈や動詞から移動や方向を表すことが明らかな場合でも、後置される不変化詞が使用されることが多く、移動や方向

の意味を強調しているのではないかと考えられる。

今後はさらに用例を増やして、低地ドイツ語間での方言同士の比較や、前置詞と後置詞の明確な使い分けのあるオランダ語との比較を考えている。

< 附記 >

本論文は京都ドイツ語学研究会発行の“Sprachwissenschaft Kyoto 11”(2012)に掲載された“Die syntaktischen Merkmale des Niederdeutschen mit seinem schwachen Kasussystem -seine analytische Beschaffenheit-”に加筆、訂正したものである。

< 参考文献 >

- Appel, Heinz-Wilfried (2007) “Untersuchungen zur Syntax niederdeutscher Dialekte” Frankfurt am Main, Peter Lang
- Appel, Heinz-Wilfried (2004) “Zur Differenzierung von Dativ und Akkusativ im Neuniederdeutschen” Stuttgart, Franz Steiner Verlag
- Di Meola, Claudio (2000) “Die Grammatikalisierung deutscher Präpositionen” Tübingen, Stauffenburg Verlag
- Goossens, Jan (1973) “Niederdeutsche Sprache - Versuch einer Definition” Neumünster, Karl Wachholtz Verlag
- Grimme, Hubert (1910) “Plattdeutsche Mundarten” Leipzig, G.J.Götschen'sche Verlagshandlung
- Kloock, Marianne Viechelmann, Ingo (1989) “Uns plattdütsch Spraakbook” 2.Aufl. Hamburg, Helmut Buske Verlag
- König, Werner (2007) “dtv-Atlas Deutsche Sprache” München, Deutscher Taschenbuch Verlag
- Klaus, Cäcilia (1999) “Grammatik der Präpositionen” Frankfurt am Main, Peter Lang
- Lindow et al. (1998) “Niederdeutsche Grammatik” Hamburg, Verlag Schuster Leer
- Lindow, Wolfgang (1994) “Die niederdeutsche Sprache. Einführende Handreichung für Lehrende” Bremen, Verlag Schuster Leer
- Meier, Jürgen (1978) “Zur Behandlung der Syntax in den niederdeutschen Dialektwörterbüchern” Stuttgart, Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik 45
- Meyer, Gustav Friedrich (1983) “Unsere plattdeutsche Muttersprache” 2.Aufl., Süderheistedt, Verlag H. Lühr&Dircks
- Möller, Frerk (2004) “Niederdeutsch ein fach im Spiegel seiner Wissenschaftlichen Bibliographie” Stuttgart, Franz Steiner Verlag
- Rohdenburg, Günter (1998) “Zur Umfunktionierung von Kasusoppositionen für Referentielle Unterscheidungen bei Pronomen und Substantiven im Nordniederdeutschen” Stuttgart, Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik
- SAAS (2001) “Plattdeutsche Grammatik Formen und Funktionen” Wachholtz Verlag Neumünster 第2版
- Saltveit, Laurits (1983) “Handbuch zur niederdeutschen Sprach und Literaturwissenschaft” Berlin, Erich Schmidt Verlag Simmler, Franz (2007) “Syntaktische Entwicklungstendenzen in der deutschen Gegenwartssprache” 『エネルギーア32号』ドイツ文法理論研究会
- Stellmacher, Dieter (1981) “Niederdeutsch Formen und Forschungen” Tübingen, Max Niemeyer Verlag
- Stellmacher, Dieter (1981) “Niedersächsisch” Düsseldorf, Prädagogischer Verlag Schwann
- Stellmacher, Dieter (1990) “Niederdeutsche Sprache Eine Einführung” Bern, Verlag Peter Lang
- Stellmacher, Dieter (2002) “Niederdeutsch-Hochdeutsch-Oberdeutsch-Südhochdeutsch. Dialekt und Dialektbeurteilung in Nord und Süd” Rostock, Rostocker Beiträge zur Sprachwissenschaft
- Teer, Tran und Zähre (1958) “Plattdeutsches in unserer Schriftsprache” Rendsburg, Verlag Heinrich Möller
- 岩崎英二郎 他編 (1994) 『ドイツ言語学辞典』紀伊国屋書店
- 亀井孝 他編 (2007) 『言語学大辞典 第六巻 術語編』第5刷, 三省堂
- 河崎靖 (2008) 『ドイツ方言学 —ことばの日常に迫る—』現代書館
- 西郷啓造 (1954) 『ドイツ語前置詞の研究』三修

社
渡辺格司 (1985) 『低ドイツ語入門』第3版, 大
学書林

<調査対象>

Evangelisches Bibelwerk, Katholisches Bibelswerk
(1967) “tetrapla 1964”, Leipzig
Muuß, Rudolf (1984) “Dat Nieu Testament”
Brekum, Breklumer Verlag, 第2版
Jessen, Johannes (2006) “Dat Ole un dat Nieu
Testament in unse Moderspraak” Vandenhoeck&
Ruprecht, 旧約聖書：第9版, 新約聖書：第11版
聖書 新共同訳 (1998) 星共社